

KOOH00Ⅲ航海と相模湾

○藤岡換太郎（神奈川大学），満澤巨彦・西川 徹・大橋みさき（海洋研究開発機構），三森亮介（葛西臨海水族園），高橋直樹（千葉県立中央博物館），KOOH00 メンバー*

2008年より広報事業の一環として相模湾でKOOH00航海を始めた。この航海は相模湾の周辺に存在する博物館や水族館と共同で、海洋と地球の特に相模湾のアウトリーチの一環として始められた。2012年にはその3度目の航海を相模湾の外洋で行った。以下はその概要である。

#1426 潜航は相鴨トラフから派生した東西性の野島海底谷とその支谷（南北性）との交点の水深1508mの地点に着底し、支谷の西壁に沿って北へ潜航し、1055mで離底した。海底谷の壁を作っている堆積岩の成層構造が見られた。海底谷の壁には激しい浸食の構造が見られた。それは陸上の河川で見られる浸食構造と同様であった。海底谷の中央では砂や泥が厚く埋積しており、ゴミがまとまって集まっている箇所や茶色い葉っぱが何枚も見られた。巨礫があつてその周りにえぐれた構造が見られたがこれは海底に強い流れがあつたことを示している。またリップルマークも観察された。

野島海底谷やその支谷は陸上の房総半島の大きな河川とは直接にはつながらない。房総半島の南部には大きな河川は存在しない。このような大量の堆積物が海底の谷を埋積し、また浸食構造を示す強い流れのあることは驚きである。海底谷の岩石（主に泥岩）は房総半島の陸上に露出する岩石とよく似ている。堆積物は厚い砂や泥からなるタービダイトや土石流堆積物で、何度も流れたことが分かったが砂の部分は回収できなかった。

一方、生物に関しては、場所により海底谷の壁には多くの付着生物が見られた。水深1340m付近の岩面が少しオーバーハングしたような部分には特に多くの付着生物が見られ、潮流に乗ってくるマリンスノーなどの有機物を摂食するのに都合が良い場所であると思われる。ただし、同じ地点でも岩の上面には堆積物が見られ、可視的な付着生物はあまり見られなかった。水深1339mで岩に着生していたウミユリ綱の一種をサンプリングした。この周辺には同種と思われるウミユリの仲間が散見されたが、それ以外の場所では見られなかった。

付加体に伴う地質構造・生物相の発見・解明という当初の目的は達成できなかったが、海底谷の内部の様子が明らかにされた点では目的の半分は達成された。この潜航で岩石7個、MBARI Core4本、生物サンプル10種類が得られた。

今回の航海を含めて相模湾では都合7回の潜航が行われた。今回の潜航を含めて今後この結果をさまざまなアウトリーチ活動に生かしていきたい。

* KOOH00 メンバー

平田大二・大島光春（神奈川県立生命の星・地球博物館），森 慎一（平塚市博物館），柴田健一郎（横須賀市自然・人文博物館），根本 卓（新江ノ島水族館），野田智佳代・茶位 潔・岩瀬成知（京急油壺マリンパーク），堀田桃子（葛西臨海水族園），松本京子（横浜・八景島シーパラダイス），田代省三・萱場うい子・馬場千尋（海洋研究開発機構）

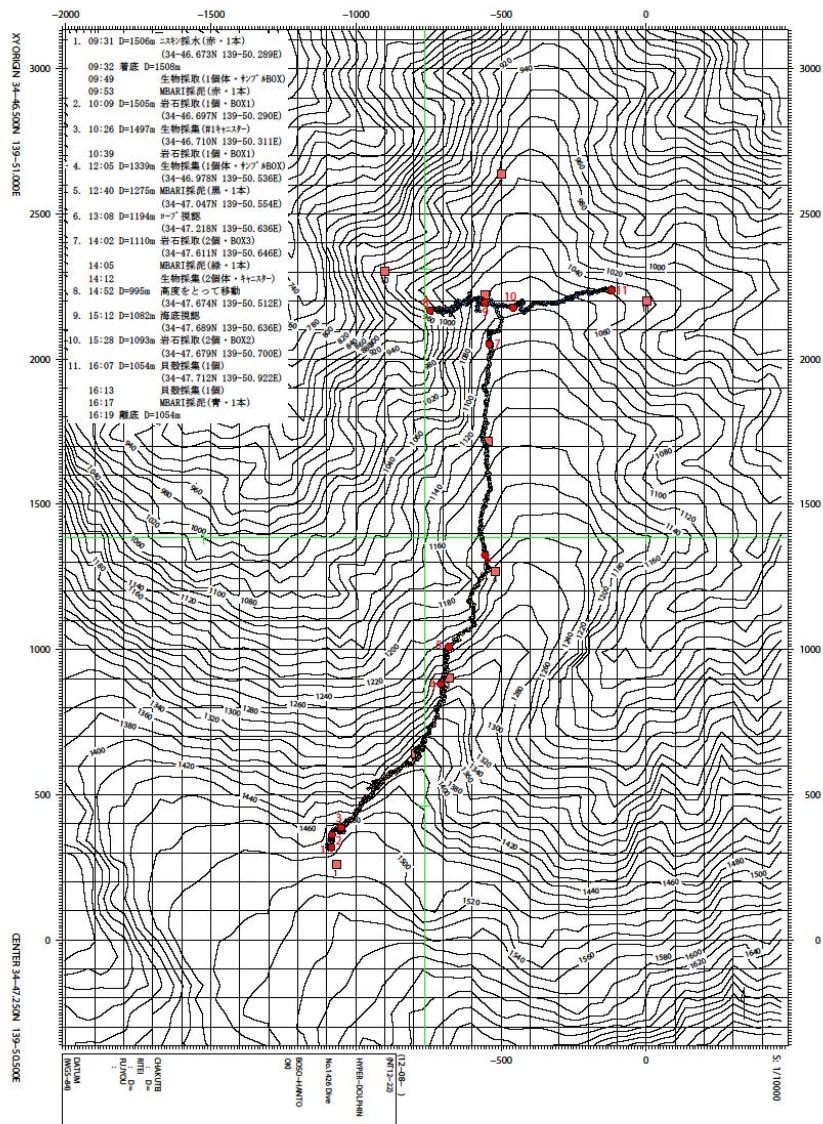


図1 #1426の潜航コース



図2 野島海底谷に散らばる瓦礫



図3 野島海底谷の侵食地形と転石